

調  
査(二)

## 道教の旅から

小南 一郎

一九七八年から七九年にかけて、一年余り北京に滞在した間に、中国の人たちに向かい、道教は現在どうなっているのかと、いく度か尋ねたことがあった。当時は、なお文化大革命の余弊の残る時期であったが、人々の答えは一樣に、宗教としての道教の活動は一切ない、ある人は、道教はもうなくなったのだとすら答えた。そのように答える口調の中には、あんな「迷信」がという口ぶりが感じられ、そうしたものに興味を持っていろいろと質問をする私をいささかいぶかるもののようにもあった。事実、その当時、全真教の総本山である北京の白雲觀に、いく度も道を探ねながら行ってみると、そこは解放軍の宿舎となっており、とても宗教活動を行ない得るような環境ではなかった。せめてその門となつてゐる牌樓だけでも写真に撮つておこうと外からカメラを向けたが、門衛をしている兵士にそれも禁じられてしまったのである。

調  
査(二)

昨年、一九八二年秋、中国社会科学院の世界宗教研究所の招きを受け、福永光司教授を団長とする九名の道教研究者が「道教遺跡參觀団」を結成し、中国各地の道觀などを訪問する機会にめぐまれ、私もその一員に加わることができた。この旅行中に見た中国における道教の現況は、上に述べた三、四年前の様子とは大きく変つていた。我々は道教遺跡・參觀団を名のつたのであるが、訪れた道觀のほとんど全てに道士がおり、現に宗教活動が行なわれていて、遺跡と呼ぶにふさわしいのは唯だ一つ、廬山東麓の簡寂觀のみであった。当初の心づもりでは、たとえ遺跡であっても、現地にその宗教活動のあとを踏みしめ、その自然的また社会的な環境を目に見ることは、書物から接近することが中心となる我々の道教研究に裨益する所が多いであろうと期待したのであるが、その心づもりを大きく超過して、予想外の成果を挙げることができた。

三週間足らずの、中国の成語で言えば「馬を走らせて花を看た」だけのあわただしい探訪旅行ではあったが、世界宗教研究所の特別の配慮と各地の関係者のご助力とを得て、これまで日本の研究者が訪れることの少なかった場所にも行くことができた。ここに、我々が訪問したいくつかの道觀の現況を紹介してみようと思う。

中国の現在の道教は、最も大雑把に言つて、天師道(正一派)と全真教との二大流派から成つてゐる。その全真教の総本山が、北京の西の城壁(今はない)のすぐ外に位置する白雲觀

である。前述のように、三、四年前にはここは解放軍の宿舍となつていたのであるが、今はその軍隊もいなくなり、牌楼は塗りなおされ、建物は改修されて（白雲觀の建物は重点文物の一つとなつている）、ここに中国道教協會の本部が置かれている。

白雲觀は、全真教の教祖である王重陽の晩年の高弟、丘処機（長春真人）がここに住み、ここに葬られたといういわれを持つ道觀である。ここには、いちばん奥に、道教の哲学的な宇宙構造ののつとつて三清の天尊と天地の神々を祭る三清閣、四御殿が置かれ、そのほか様々な道教の神々を祭る建物や宗教儀式を行なう建物などが連なるが、その中でも特に興味深かったのは丘処機を祭る丘祖殿であつた。丘祖殿には、丘処機の像の前に、大地から生えた靈芝のようなかっこうをした大きな鉢（デコボコしているが直径は一米もあろうか）があつた。これについては様々な伝説があるようであるが、説明によれば「遺鉢」であるとのことであつた。白雲觀の他の天尊たちは自由に写真を撮ることができたのであるが、丘祖像だけは写真に撮られないでほしいと言われた。中国の人々は一般に写真に撮られることを好まない。説明にあたつてくれた道士たちが、我々の祖師だけは写真にうつさないで欲しいと言つたことから、彼らの信仰にとつて、哲学的な道教の神々よりも、祖師の丘処機の方がずっと重要な存在であることが窺われた。

白雲觀は古くより十方叢林として多くの修業者たちが集う所であつたが、現在もなお、若い道士たち（年令を尋ねると十代後半の者たちが多かつた）が、浙江やあるいは四川の青城山な

どからここに集つて来ていた。彼らの道冠の形がさまざまであるのは、出身地の差によるとのことであつた。そうした若い修業者たちに、なぜ道士になつたのかと尋ねると、「道教のすぐれた伝統を發揚するためだ」という模範的な回答もあつたが、また、自分の家は父祖以来道士もおらず、直接に道教とは関係がなかつたが、自分は信仰のために道士になつたのだ、と答える若者もいた。

北京から西安へは飛行機で飛んだ。ここでは、西安市より西へ約七十キロの、終南山の麓に位置する樓觀村老子說経台に行くことができた。老子の最後については、「史記」の老子伝以來、関せきを出て西方に行き、行く方知れずになつてしまつたとされている。その関を出るに際して、関令（関守り）の尹喜の請いに応じて書き留めたのが「老子道德経」五千文（いわゆる「老子」）である。老子が最後に出了た関は、普通には河南と陝西との境にある函谷関だとされるのであるが、そのほかに陝西から甘肅への境となる隴関であつたとする説や、陝西から漢中を経て四川につながる道の途中の散関だとする説もある。

終南山の山ふところに位置する樓觀村の老子說経台は、老子出関の関についての三つの説の内、それを散関だとする説に結びついていようである。すなわち尹喜が老子の到来を天文氣象觀測によつて予知しようとして建てたのが「樓觀」であり、この說経台において老子が五千文を説いたとされていて、終南山を越えて蜀に通じる散関もここから遠くないのである。このあたりに本拠を置いた樓觀派の道教については、なお分からな



武漢の長春観において、  
道服を着けた筆者

い所が多いが、南北朝期にすでに重要な道流の一つとなっていたことは確かである。恐らくこの楼観派が老子化胡説(老子は関を出て西方に旅をし、釈迦牟尼の師となったのだとする説)を育てるのに大きな力があつたものであろう。老子化胡の伝説の中に、老子は西域に行くに先立ち、まず成都に出現したとする筋書きがあるのも、この楼観の地が散関を介して蜀に通じていたことと何らかの關係があろう。ちなみに老子が尹喜に対し、成都の市場で青い羊を求めるように、そうすれば自分と再会できようと言言した所から、成都の市内には青羊宮という道観があつて、現在に残る。

この楼観派の道教は、南北朝末から唐代にかけて、時の政權と結びついて大きな力を持った。特に唐代にはここに宗聖観が営まれて唐王朝の尊崇を受けた。その尊崇が、唐の王室李氏は老子李耳をその祖先とするのだと称したことによることは言うまでもない。宗聖観には宗聖宮とも呼ばれて、宋元を通じ

重要な道観の一つであつたが、明代以降、衰えたとされる。老子説経台の下に広がる平地にその宗聖観のあとが残っている。建物は完全になくなつてしまひ、建物のあとであろうマウンドがいく段にも続く中に、歴代の数多くの石碑と古い松柏だけが現存する。その石碑は、説経台に保管されているものも含め、歐陽詢の「宗聖観記」以下七十余基が現存すると案内書にはある。人間的な活動が終息してしまつたあとに、その活動を公式的に記録し後世に伝達しようとする石碑が群立する様は、中国の人々の、文字記録に託するほとんど執念とも言うべき心情を感じさせるものがあつた。

「終南捷徑」という成語がある。もともとは唐代の道士の司馬承禎が、せ、隱者をひにくつた言葉に出るのであるが、それは、官界での地位にありつけぬ人物が、都の郊外の終南山で隱者のまねをする。隱者として名が立つと朝廷からお召しがあつて官位が与えられる。そこで「終南山こそは出世のはや道」と言われたのである。長安に都があつた時代、その郊外に連なる終南山は、宗教的な雰囲気強く帯びた地域であつた。もちろんまじめな宗教者も多くいたであらうが、しかしまた、都における政治的な動きに鋭く反応して、様々なおもむきの渦巻く場所でもあつたのである。

更に言えば、六朝期、江南の道教界で大きな影響力を持った人物たち、たとえば葛洪、陸修静、陶弘景などは、いずれもが江南土着の豪族の中から出てきた人々であつた。王氏、謝氏を代表とする北方から移住してきた貴族たちに政治の中樞を独占

されて、政權から疏外された江南土着の豪族たちの中から、道教思想の展開に大きな働きをなす人々が多く出たのである。そうした中に、宗教者として政治に深く関わり、「山中宰相」と呼ばれた陶弘景の例などもある。規模の大きさとその質とに違いがあるとは言え、彼らもまた一種の「終南捷徑」を歩もうとしたのだと言えよう。南北朝から隋唐にかけての時期の、すなわち階級意識の強い時代の、宗教者たちの活動には、常にそうした屈折した社会的な要因が一つの原動力として強く働いていたことを忘れてはならないであらう。

もちろんそうした社会決定的な皮肉な目で宗教活動を見るばかりであってはならない。ちょうど天候もよくなく、我々が目にしたのは終南山の自然のごく一部分にすぎなかつたのであるが、しかしなおその自然には、我々の心を引きつけ、和ませるものがあつた。当時の人々の宗教的な心情に、終南山の自然は強く呼びかける力を持っていたにちがいない。同様の感想は、廬山の山麓に、慧遠の東林寺、李渤や朱熹の白鹿洞、そして陸修静の簡寂観などを探訪した際にも心に懐く所であつた。ちなみに言えば、廬山の頂上一帯の名所は、みな観光地化されてしまつて、あまり興味のある所ではない。

ここで、次に述べる武漢よりあとに訪れた所なのであるが、廬山山麓における宗教活動の遺跡について見聞した所を先に述べれば、終南山の場合と同様に、それらはいずれもが平野が山地へと傾斜を変化させる地点の近くに位置している。陸修静の簡寂観は、東の鄱陽湖の方向に向かって開いた谷の奥にあつ

た。もう完全に廃墟となり、大きな石の上にあるくぼみが陸修静の足跡だと言つて示されたほか、門の跡だとされる不確かな石組みがあつただけである。ただ自然は当時とほとんど変化がないのであらう。附近の人に、鷓鴣山はどれかと尋ねた所、すぐさま横手の山を指さしてくれた。劉宋の明帝によつて都に呼び出された陸修静は、この地に帰りたいと望みながら結局都で死に、弟子たちがその遺骸を簡寂観まで運んだという。

この陸修静は、陶淵明、慧遠とともに虎溪で虎の声を聞いて笑ひあつたという、虎溪三笑の伝説に登場する人物である。もちろんこれは三人の年齢が合わず伝説にすぎないのであるが、東林寺の門前近くには虎溪と記した石標が立ち、石の虎までが置いてあつた。それはさておいても、陶淵明が、慧遠が、そして陸修静が、自らの思想を築いてゆく中で廬山の自然とどのように感応し合つていたのかは、なんとしても解明したい所である。自然の中に「真意」があるという陶淵明の表現を、近代の自然詩人たちの表現と同一の地平で理解してはならぬであろうことは、たとえば同じ時代の謝靈運の自然詩の中の、硬質で哲学的な自然描写からも窺われる所である。自然と思想や宗教との相関関係は、古くからの問題であると同時に常に新しい疑問を我々に投げかけてやまない。

西安の次に訪れた武漢では、長江の船を待つ間の短かい滞在ではあつたが、道観としては長春観を、仏寺としては婦元寺を訪れることができた。長春観は、その名からも知られるように、長春真人丘処機が一時ここに住んだとされる、長江中流域

の重要な道観の一つである。

武漢の町の中に位置するこの長春観も、少し前までは病院の一部として使用されていたが、最近、道士たちの手にもどされた。ここに湖北省武漢市道教協会が置かれて、建物の修復作業などが進行中であつた。ここでは、ちょうど武漢にやつて来ていた、襄陽西方の名山である武当山の道士たちとも会うことができた。またここで初めていく人かの女性の道士とも会つた。男の道士を乾道、女の道士を坤道と呼ぶという。そうして説明によれば、湖北省全体で現在、乾道が三十人であるのに対し、坤道は一六〇人から一七〇人いるという。女性の道士の方が圧倒的に多いのである。その理由を尋ねた所、旧社会において、家庭の中で圧迫を受けて行き所なくなった女性たち、特に夫に先立たれて家におれなくなった女性たちが多く坤道になつたのだということであつた。それにしてもこの男女の比率の大差は注目に値いするであろう。仏教の尼姑の場合も同様であつたのかどうか。もしこの較差が道教の場合に特に著しいのだとすれば、そこからも道教が中国の社会の中で果していた役割りの一部を窺う手がかりが得られそうである。

全真教とならぶもう一つの道教流派である天師道の道士たちと会うことができたのは、この旅行も最後に近づいたころ、蘇州のまちの繁華街にある（恐らくはこの道観の門前に繁華街が形成されたものであろう）玄妙観においてであつた。天師道は、伝説的には後漢時代末の張陵（張道陵）や張魯たちから出るので、その血統が現在の張天師にまで受け継がれているとされ

る。その本拠は、隋唐時代以来、江西省の竜虎山に置かれていた。王重陽らの宗教改革運動が否定しようとした古い要素を多分に残した宗派であるが、しかし全面的に打倒されてしまうこともなく、天師道は全真教と共に今日も中国の道流を二分する勢力を保っている。全真教が帯妻肉食などを禁じて欲望の否定を打ち出したのに対し、天師道はそれを否定しない。張天師の血統が現在まで続いているのも帯妻せねば不可能なことである。旅行の最後にお会いした、上海社会科学学院で道教の研究を行なつておられる陳耀庭氏が、父親は道士であつたと自己紹介されたので、全真教に属したのか天師道であつたのかと質問した所、にやりと笑つて、天師道の道士でなければ自分生まれなかつた、と答へられた。尋ねるまでもなく自明のことなのである。

玄妙観の道士たちは、自分たちが欲望を否定しない立場にあることについて、我々は不老長生を求める者だからだ、と説明した。生命を求める道教がその生命の発露である欲望を強いて否定するのは矛盾だと言うのであろう。全真教の宗教改革運動が完全に天師道を圧倒しさりはしなかつたのは、確かに玄妙観の道士たちも言うように、道教の基礎には生命への愛着があつて、倫理的なビュリタニズムとはなじまぬ所があるからなのであろう。ただ玄妙観の日常の勤行について質問した所、毎朝、気のむいた人が「清浄経」を読むとのことであつた。こうした情況が天師道の全ての道観でそうであるのかどうかは知り得なかつたが、あまりにも自由すぎて、宗教としてはやはりな

んらかの「型」が必要なのではないかとの感想を懐いた。

以上に我々が訪れた主要な道観での見聞のいくつかを記した。もちろんそうした道観においてのみ得る所があったのではない。仏教寺院においても、あるいは都市の神である城隍廟においても、それぞれに中国における宗教信仰について考える際に貴重なものとなるであろう見聞や体験を得ることができた。

たとえば上海の玉仏寺を訪れたとき、ちょうどある老夫人の葬儀が準備されていた。親族が集まって鈍色の錫箔で折り紙のようなものを作っており、尋ねると折り上がったものは銀錠（馬蹄銀）を模したものであるという。説明によれば、紙銭は焚けば天の神の所に行ってしまうが、この銀錠の方は死者のもとに行くとのことであった。古来の中国の信仰の二大基本要素である天神崇拜と祖先崇拜とが、こうした形を取って人々の習俗の中になお確かな位置を占めていることを知り、いささか感動を覚えた。

我々がこの旅行で手に入れたのは、数は多いが断片的な知識ではない。そうした断片的な知識を大きな全体の中に位置づけ、個々の知識から深い意味を抜き出すことができるようになるかどうかは、我々の今後の努力にかかっている。道教とは何かという議論は常に繰り返され、しかも常に明確な解答がないままに終わっている。研究者の教だけがあった道教像があるのかも知れない。ただ中国の社会の中に、いわゆる道教を緩やかな核とする、大きな文化複合体があることは確かである。この複

合体は、その中心部分での求心性が弱く、その部分が常にぼやけているように見える。逆にその周辺は広くひろがって、実に様々なものをその渦の中に巻き込んでいる。仏教との相互の影響関係もその一例である。道観の中に見える仏教からの影響は言わずもがな、仏教寺院の中にも様々な所に道教からの直接間接の影響を見て取ることができる。教理によって仏教と道教とを峻別したりするのではなく（実は教理の点でも両者の混交は大きいのであるが）、両者が入り組み合っている様相を全体的に理解しようとする、そうした広い視点こそがこの大きな文化複合体をとらえるのに最も有効なものであるのではないかというのが、今度の旅行での経験を総括しての感想である。

（筆者 こみなみ・いちろう 京都大学文学部「中国語学・

中国文学」助教授）